

(講 評)

子どもの心を育てるには

—— 分科会に参加して ——

飯 田 正 江

山々に囲まれた静かな田園地帯、その中にある入山辺保育園の園児と老人ホーム松風園の方々との暖かな交流を、ビデオやプロジェクターを駆使しながら報告していただいた。そこからは子ども達のかわいい姿や松風園の方々の倅せそうな笑顔や、それに関わった先生方や地域の人々等の生き生きとした姿が写し出されていた。

これは平成元年から本年まで、保育園と松風園とで常に話し合い、目的(願い)をしっかりと持ちながら実践されてきたものである。

現代社会は物質文化が発達し我々の生活も豊かになった。しかし反面、心の問題が取り残され、社会問題となっている。

教育の中でも子ども達は「自分が社会のなかで上手に生きていく手立て」のみを教えられ走ってきてしまった。むしろ「人のためになる人間、人の役に立つ人間」を育てる支点こそ大切なのではないだろうか。

ここでの世代間交流事業に寄せる保育者の願いは、人間尊重の基本的立場をふまえ、思いやりや助けあいの気持ちをもち、「ともに生きる」喜びを味わえる子どもの育成、そのために低年齢から「他者を大切にしていける心」を育てたいとしている。具体的に8つの願いを述べ、それらが日々の生活の中で、両親や保育者の姿勢こそ生きた教材であるとしている。

平成元年から平成7年の流れをみると、平成4年までは始めの交流として6月下旬に観劇が行われている。これは、いっしょに観劇することで共通の話題ができた。ひ

とつの空間の中で共に体験し、互いに感想を述べ合い、それを受け止め共感ができたならば、そこに暖かい心の交流が生まれる。

祖父母参観は、どこの園でもみられるが、その内容は子どもの歌や劇等の参観で一方通行である。しかし、ここでは祖父母が昔の遊び、手品、大正琴演奏等、参加している点が注目される。子ども達は、祖父母の上手なこままわしやケン玉に目を見張り歓声を上げている。祖父母を尊敬し、自分もやってみたいと挑戦する。こうした交流の中で自然に昔の遊びが伝承される。

9月下旬から3回運動会が続く。大空の下でいっしょに手をつなぎふれ合いながら身体を動かす気持ちよさ、笑顔が明るい。心も体も健康である。

さらに、焼きいも大会、観劇、お別れ会等と続く。子どもが園生活に慣れた6月下旬から3月まで何回もの交流が行われている。もちろんその他にも日常の生活の中での交流があり、例えば「あいさつ」等も互いに顔なじみとなり明るくかわせる様になると、子どもと老人のほほえましい姿が目に見え浮かぶ。

平成5年から年の始めの交流として陶芸教室があげられている。年長児であるが、それまでの4年間の積み重ねがあってこそ可能となったのである。さらに、本年は石けんづくり、手芸教室等、製作するものが加わってきている。手を使い頭を使い何かを作っていくことは、形がだんだんできてきて楽しいものであり、両者を育てるものも大きい。また、これらに参加している人々が、保育園と松風園からさらに保護者、消費者会、地域の老人クラブ、地域の方々へと広がっていった。

人の心を育てるには、豊かな感情を育てることであろう。感情のあり方は人間の生涯にわたってその人らしさを作る精神生活の基盤となる。神谷美恵子は「審美的感情がいつ、どのように芽生えるのか、美という感情が人の心の旅の質を決める上できわめて重要である。審美的感情は、音や色や形に関するものばかりでなく、もののバランスに対する感覚をも含んでいるのではないだろうか。したがって長ずるに従って出会う人間社会のもろもろの現象に対しても、あまりに度外れなものや、グロテスクなもの、醜いものに本能的に反発をいだく根となるのではなかろうか。また現実への過渡の密着を防いでユーモア・滑稽・おかしみ「もののあわれ」など、心の旅に微妙な味

わいをつけ加えるのではなかろうか。道徳的・宗教的感情さえ、この審美感の助けなくしては人間性を無視した方向へ暴走し、高く美しいものたりえないと考えられる」と述べている。

今回の実践の全過程を通して、上記の審美的感情を育てているといえる。従ってテーマである「子どもの心を育てるには」を世代間交流を通して充分実証できた。種々な体験を通し、文化を伝承し、さらにそこから子ども達は遊びの中でそれらを発展させ新しい文化の創造へと繋げていくことであろう。まさに総合的な保育であり、心と身体と社会性を育てている。さらに今後も継続し、質の高い交流をめざされることを願うものである。

(本学 教授)

【引用文献】

こころの旅 神谷美恵子 P51 日本評論社